立教大学 社会福祉ニュース

第4号 昭和47年1月29日発行 編集発行人 早坂泰次郎 東京都豊島区西池袋3 立教大学社会福祉研究所

岩井さんを悼む

副所長　早　坂　泰次郎

巻頭のことばを私が書かなければならなくなったこと、それが追悼のことばであることは何とも残念である。夏ごろからの岩井さんの病状をうかがうにつれ、いずれこの日がくることを覚悟しなければなるまいと思ってはいたもののそれがこんなに早いとはまことに意外であった。

岩井さんの真情に触れた人なら誰もが知る通り、彼の生涯は配慮そのものであった。岩井さんがいるところ、いつでも、どこにでも配慮があった。その配慮は時に鋭い論理、きびしい批判となって、怯惰の徒を畏怖させることがあった。そして世の中に怯惰の徒は多い……。そうした人々は岩井さんを誤解した。しかしそうしたきびしさのかげにやはり配慮があり、あたたかいまなざしがあったことは、彼としばらくつきあってみれば誰もが感ずることであった。

１９７１年１１月３日に、医科歯科大の病室を訪ねたとき、もはや言葉が自由でない状態だったにもかかわらず、ちょうど来合わせておられた夫人に、向いの病室の患者さんが今朝から痛みがひどいそうで気の毒だ、と一生懸命に話していた岩井さんがまぶたに焼きついている。そこにもやっぱり配慮があった。

私個人のことを言わせていたゞくなら、学生部以来ほゞ１０年のつきあいであったが、彼にとって決して頼りになる同僚ではなかったことを、私自身よく知っている。彼の生きかたはあくまでも彼流の生きかたであり、彼の配慮はあくまでも彼流の配慮であって、私に真似のできるものではなかった。それはいわば「体質」のちがいで、どうにもならないものであると思う。大声で討議したことも一再ではなかった。仕事の分野もかなりちがっていた。しかしそれにもかゝわらず、一番大事なところで岩井さんと私は一致した。１０年間のつきあいは、そのことのくりかえしだったといってもよいと思っている。

たゞ一つ残念でならないのは、晩年の岩井さんに見えた疲れに、何にもしてあげられなかったことである。配慮（care）とはもともと、〝嘆きかなしむこと〟（sorrow；lament）を意味した。それは心を労することである。岩井さんはいつも心を労したあまり、肉体をも労していたように思う。いわゆる立大紛争以後、そのことはとくに眼立った。

しかしいつまでも追憶にひたることはやめよう。岩井さん自身がそのことを一番いやがる人だった。

岩井さんの急逝のショックで、研究所の今後に不安をもつ人もいるであろう。しかしそうした不安は一切無用である。たしかに岩井さんの足跡が大きかっただけに、残された問題は巨大であり、処理しなければならない問題はあまりにも多い。当分は所員、研究員の方々にお願いしなければならないことがたくさんあると思われる。

しかしこの研究所はもともと一つのまぼろしから生れた。また、この研究所のレーゾン・デートルはまぼろしを追いつゞけることにこそあるといってよい。制度や組織はその手段でしかない。固執と回顧へのとらわれはまぼろしに死をもたらす。〝精神〟の上のとらわれであろうと、制度や組織へのとらわれであろうと同じことである。

建設的な批判や助言をどしどし頂きたいと心から願っている。

１９７２年１月１日早朝しるす。

（はやさか・たいじろう）

話題

鈴木育三

――― 旅の途中で 鹿島育成寮での一年 ―――

私は、「旅」ということに非常に関心が引かれます。まだ、知らない遥かなるものを求めて断えず歩いてゆく人生が好きです。ですから、あまり過去について述べるのは嫌いなのですが、今日は、旅の途中で、私に豊かな経験をさせてくれた、鹿島育成寮でのことを少し話したいと思います。

鹿島に行つた動機

'69年の一年間は、多くの大学生と同じように、私もまた、大学闘争の中で提起された様々な問題に捉えられてしまいました。私は、元来は決して、政治的、社会的な問題に関心が向いてはいなかったのです。否、むしろ、それから遠ざかってさえいたのです。キリスト教の牧師に成ることが、私の希望であったのです。ですがあの大学闘争は、そういう自分をズタズタにしてしまいました。しかし、それを、今、悔いてはいません。大学院を卒業したら、すぐにでも神学校へ進もうと思っていた私は、闘争の中でいつしか、大学の外へ、社会へと追いやられていっていました。それは、『働いて、生活していくこと』という当然のことを要求して来たのです。私は、大学に八年間も、浮草のように漂っていたのです。もう、これ以上、大学にいたら、腐ってしまうと思ったのです。それ以上に両親の下で、ヌクヌクとしていては、いけないと思ったのです。私が、「帰える」という言葉で意味していたのは、両親の家を意味していました。闘争の中では、友人の多くは、自から、「帰るべき処」を放棄していきました。そして自から、生きる場所を求めて、旅立っていきました。私自身も、このことが内的な欲求として強くありました。そんな時、先輩のひとりが、鹿島育成寮を紹介してくれたのです。私は、その日のうちに電話で、就職を申し込みました。契約は一年間、且し、場合によっては、更に契約年数を一年ごとに更新するということで、就職が許されました。しかし、まだ、神学校への希望は捨てはおりませんでした。

最初の印象

初めて、私が、鹿島を訪れたのは3月のどんよりと曇った薄暗い日でした。何もかもが、土色に枯れていました。施設での最初の印象を今でもはっきりと記憶しています。それは、寮生が、「どうぞ」といって、ついでくれたお茶が、どうしても飲めなかったことです。あの渋い色のふちの欠けた湯飲み茶碗を今でもよく思い出します。何故だったのでしょう。不自由さとみじめさの私自身の心理的な反映だったのでしょうか。ともかく、非常に複雑な気持で、最初の数日を過していました。寮生は、誰れも彼れも、皆同じようにみえてしまいます。同じ服装、坊主頭、何んだか、とても労痛でした。そして、朝、定時に流れる同じレコード、同じリズム、同じ歌、とてもたまらなく反撥を感じました。私の生活の中には、もうすでに、同一ということに耐え切れないものが育っていたのです。それは、自由という生活、自己主張、ということが生活化していたからでしょう。

最初のミス

私は、最初の朝の当番に当った日。いつも使っているレコードとは別のものを流してしまいました。正直なところ、かなり意図的ではあったと思いますが、いつも使っているレコードにもう我慢がならなくなっていたのです。それにレコードは非常に古くなっていましたので、別なレコードを使ってしまったのです。また、施設での反復訓練ということもすっかり忘れていました。しかし、これは、別な結果を生じることになりました。つまり、レコードのバラエティーを増すということになったのです。勿論、反復訓練という意味を失しなわないように。日に三枚のレコードを10日づつ使うようになりました。それに、起床以外のレコードは、もっと自由に色々なものを使うようになったのです。

初めて、施設に勤めると、色々な失敗をします。しかし、時とすると、それが、状況を変えることにもなります。しかし、また、それは決定的に、マイナスの結果を生じることもあります。施設というものは、どうしても隔離され勝ちですから、いつも、目を覚していないとマンネリ化してしまう恐れがあります。しかし、場合によっては、良い生活習慣を身につけるという点では、必ずしも、マンネリズムは否定されるべきものではないと思います。施設で一番注

意しなければならないのは、指導する職員の方が、問題が大きいと思います。

寮生ひとりびとりが、みんな違う。

しだいに、寮生と生活を共にし、一緒に汗を流して働くなかで、漠然としていた寮生一般の中から、ひとり、びとりの顔が見えてくるようになりました。それと同時に、自分の中にも、何か、生き生きしたものを感じるようになってきました。互いに防衛が溶けていく過程で、真顔がのぞいてきます。笑ったり、泣いたり、怒ったり、それはそれは、本当に生き生きしています。そうです。最初の印象の仮面が破れていくことは、私自身の寮生への関り合いの変化の過程であったのです。遠くから、ながめていたらみんな同じにみえてしまう。近くによって、生活の中で共にあることは、実に、生々しいものなのです。観念的なものは死に等しいと思いました。「精薄者」というカテゴリーをもって、全てを表現してしまうことの愚かさをつくづくと味いました。そうなんです。みんな、ひとりひとり、独自的な個有の生の持ち主なのです。みんな、他社とは、異った生の脈絡の中に生きてきたのです。それは、自明なことなのでしょうが、私には、驚くべきことでした。誰れもかれも、他にかけがえのない宝物なのです。寮生ひとり、びとりとの出合いは、この私を、しだいに豊かにしていってくれました。大学の黒板の文字は、生き生きした、ひとり、びとりの姿を描き出すことは難かしいのです。頭の中でではなく、生活の中で、人々に出会う以外に、私たちを豊かにしてくれるものはないのだとつくづく思い知らされました。

出　合　い

R．N君のこと

五月の或る誕生日のパーティの日、私は、東京に用事があって、この日のパーティに出席できませんでした。その日、私の担当していた寮生のひとり、R．N君は、皆の前で、自作の歌をうたいました。

「チュン、チュンスズメは裸のスズメ
　母さんスズメはいっちゃった。
　お窓の外にいっちゃった。
　チュン、チュンスズメを残していった。
　ブロック先生、いっちゃった。
　もう、僕はおしまい、僕はおしまい……」

彼は、この歌を、涙を流しながら、幾度も幾度も繰り返してうたっていたということを同僚から、聞かされて、深く感動してしまいました。この頃の私は東京にまだ仕事を残していて、気軽な調子で、外出していたのです。心底、この世界に身を投じていなかった自分が、非常に恥かしくなりました。急いで、彼のベッドに行きますと、彼は、まだ、目をさましていて、私の帰るのを持っていました。「先生帰って来たよ！」そう声をかけると、いかにも、喜しそうな顔をして、ニッコリ笑いました。この時は、本当に私も喜しくて、思わず泣いてしまいました。初めて、この時、この仕事の持っている等さ、喜びを感謝しました。とっても、寮生のひとり、びとりが、いとおしくてならなくなったことを憶えています。それは、決して、「同情」というようなものではなく、共に生きている喜びみたいなものです。私が、彼等、ひとり、びとりによって生かされていることえの喜びです。

F．H君のこと

彼は、私よりも年上です。彼は、最初の印象は、いつも、口をもぐもぐやっていて、顔は、ひっかき傷でいっぱい、足には赤チンを真赤に塗っていて、なんだか、とっても近づき難い存在でした。それに彼は、時々、ガラスを破ったり、奇声を発したりする行動異常が著しい問題のケースのひとりでした。私が、彼と出会ったのは、六月になって、うっとおしい毎日が続いている或日、彼が、ガラスを破って、手を血だらけにしてやってきた時です。彼は、友だちに彼の大切にしている腰の手ぬぐいを取られたので、怒って、ガラスを破ってしまったのです。彼の性格が、まだつかめていない私は、どうしたらいいのやら、さっぱり分らず、本当に思案にくれてしまいました。病院で、手当を受けている間中、彼は、ぎゅっと、私の手を握っていました。ただ、もう「二度とガラスを破っちゃだめだよ」と繰り返すだけで、彼を厳しくしかりませんでした。彼のお母さんは、親しい人です。そのお母さんは、彼に合うたびに、「Fチャン、いい子でいてネ、ガラスを破ると、みんなこまるんだからネ」といっていました。彼は乗物の絵が大好きです。お母さんは必ず、手紙の空白に、彼の好きな、乗物の絵を書いてきてくれます。F君は、その手紙を宝物のように大切にしています。

彼は、心の底から、イジワルをする人間では

ありません。ただ、友達に、にらまれたり、物を取られたり、ドナラレたりすると、つい、ガラスを破ったり、衣服を破いたりするのです。精神科の医師は、彼の性格は、テンカン質のもので、対人関係に問題があるのではないかということをいっていました。彼は、確かに、ちょっとした刺激にも複雑に反応行動をします。彼のために、居室の移動も試みました。でも、ガラスを破ることは止みません。医師からの薬も飲みました。でも、だめです。本当に、彼には困りました。

夏休みが過ぎて、秋になってから、彼と一緒に、定期的に精神科医と面接をすることを試みました。そうしていくうちに、彼と私は、しだいに親しい間柄になってきました。彼の言うことも、非常にはっきりしたものになってきました。行動も、開放的になってきたようです。ほんとうに、少しづつですが、彼のガラスを破る行動は減少してきました。私が、外出した時、帰ると、「センセイ」といって、とびついてくるのは彼でした。或日、彼が、ふらりと外出してしまった時、彼は野の花を取ってひとりで帰ってきました。その時は、心配して、警察に捜索願いを出した程だったのですが、無事、帰ってきました。今でも、林の中の小道をバイクに乗って捜しまわったことが忘れられません。彼は、後で、「センセイに、花を取りにいったんだ、といって笑っていました。彼は、本当に、私に心配をかけたひとりです。それだけに、彼の事が、今でも心配です。彼は、本当は、いいヤツなのです。

K．K君のこと

彼は、私と同じ年令です。彼は、私が寮に入った時は、いわゆるボス的存在でした。でも、彼には、誰れにもまけないで、努力する意志の強さがありました。彼は、社会に出て働くことを切望していました。彼のことで印象に残っているのは、初めて、寮生と一緒に、散歩に出た時、鹿島の海辺で、ひとり、グループから離れて、じっと海をみつめている彼の姿でした。「先生、海を見るのが僕は好きなんです。胸の中がスッーと広くなってくるからです。時々、僕たちを海に連れてきて下さい。」そういって、いつまでも、潮風にあたりながら、海をみつめていました。

彼は、昨年の十月、みごとに日立系の家庭電機器具のメーカーに入社しました。そして、今も元気に働いています。彼は、本当によく努力しました。社会復帰のプログラムが、最終的に決まってから、彼は、夜遅くまで、ひとりで、読書をしていました。小学校の低学年のヒラ仮名の本を、繰かえし幾度も読みました。彼の家族の人たちは、彼のために、いっしょうけんめい努力していました。それに、職親のTさんもよく彼を指導してくれました。彼は、寮を去る時、「先生、僕はいっしょうけんめい仕事をします。でも、人間関係が心配です」といっていた。でも、彼はきっと、厳しい社会生活の中で雄々しく生き抜いていくにちがいないと、私は今も信じています。偏見と差別に満ちている社会で、彼自身の生き方をもって、この厚い壁をぶち破って欲しいと心から願っています。

最近の私のこと

私は、この四月に、育成寮を去りました。そして、神学院で助手として働いています。私の担当は、Field Educationの分野です。今の私は、神学生でもないし、社会福祉のフィールドにも立っていません。両者の間に立っています。

時々、私は、寮生のひとり、ひとりを思い出します。時には、夢をみることがあります。今でも、「ブロック先生、ブロック先生」という声がするような気がします。R君が、もし、私の「帰り」を持っていたら辛いことです。今の私には、そこに「帰る」ことは出来ない。時々「行く」ことしかできないのです。でも、そこは、私の旅の途中での出来事にしては、あまりにも、私を変えさせて、しまった処でした。

（すずき・いくぞう）

（P.9からつづく）

ころ、私は次のようなディレンマに嫌気がさしている自分に気付いたものでした――何とか体系的に纏め実際の学として成り立たせようとする願いとあせりと、それがとてつもなく膨大で長い時間がかかり、結局は徒労に終るかもしれぬと思う心と……。

（まつもと・けんじ）

研究

松本健二

——施設での生活——

精神薄弱の自立を巡つて施設における指導の構造を一般的な生活の構造との対応において考える。

民間経営の施設で働いている人々と交わる機会を私は多少とも持っていますが、私が働いている都営施設との比較のなかでしばしば施設存立の財源的基盤、施設設備、対象者の重軽、指導形態および従事者の思考の柔軟さ・自由さ、果ては精神薄弱福祉全般に関する社会通念や制度上の貧困等に話は及びます。福祉事業の歴史に「公営からの切り捨て」はあったし現在でもある事は明らかであり、問題の諸源や改善への方策についていずれは誰かが纒め、告発しなければならないと私は思います。

民営・公営との格差にみられるような社会構造における二重構造的な諸問題もさることながら、ある種の文化的構造もそれに関連して無視できないように思われます。施設に働く人々が生活に根ざし或いは実際の学とも言えるような——いや、必ずしも学になる必要はありませんが、体系化した文化を自らの手で批判的に創出してきたという僅かながら貴重な例はありますが、それにも増して特殊教育学や各種の心理学および医学等、各分野からの理論の導入の結果生み出されてきた観念の方が施設に働く人々の間に、はるかに多大な影響を及ぼしているように思われるからです。しかし、それだけでは問題になりません。当面の問題は各分野からの情報をどのように咀嚼し、生活のなかで活用し精神薄弱福祉の方策を批判的に創出するかという事ではないでしょうか。特殊教育学や各種の心理学および医学等の各分野を頭から排除しようと言うのでもなく、各分野の福祉事業における指向性を否定しようとするものでも決してないのです。むしろ学ばなければならない点は多いのですが、学ぶ点が多いだけに実際の生活で各分野の成果をいかに活用し再構成しなおかつ独自の成果を生みだしてゆくかは極めて難しい課題だと言えます。しかし、そのような課題を担うはずの自律性について施設に働く人々のなかに探そうとする時、先に述べた社会構造の二重構造的諸問題や福祉従事者の労働過重等の状況を考査してもなお、その部分はおおかた灰色の空白であったように感じられ、その上文化伝承の欠如がさらに迫車をかけ、従って「公営からの切り捨て」ばかりか、ほとんどの施設が、「裏文化」からの脱却の一つの重要な鍵を見失っているように私には思われます。高慢だという批判は既に承知の上での話です。

主題に入りましょう。私がしばしば引用する例なのですが、ある施設から私達の寮に措置変更されてきた２０才過ぎの女性がある日食卓に就き自分の食器に添えて「いつも置かれているはず」の箸が無い事に気付き、怒った事がありました。食事の時間になって食卓に就けば、直ぐにでも食べられる状態にしてあったからでしょうか。

私達はその後間もなく食卓に箸立てを置き各自で取って食べるようにし、それまで数個のやかんに入れ、飲む度にそれらの置かれているテーブルまで取りにいっていたお茶を食卓ごとの急須に変え、時には茶碗で食事を摂り食卓にはお櫃を置き、食後にはそれらの食器を各自で洗うという生活に変えてきたのでした。それに伴ない、各食卓のメンバーに役割分担が生れてきたのには、遅まきながら多少の驚きを以って眺めたものでした。

それは私達に一連の反省や疑問を生み出し新たな問題の提起として私達に迫ってきたように思われます。精神薄弱の問題を発達の遅滞だと言いながら、生活においては「いつも……されている」疎外の状態に放置していて、果たして彼らをより良い発達へと向けるべく助力まる事ができないだろうか。「やらせたらできないし遅いから一緒になぞやってられない」「（比較的活動力があって意思交換が比較的よくできる少数の寮生に手伝わせ指示したり、或いは自分達でやってしまうから）多数の寮生はいつも……されている状態」にあって、私達がしばしば口にする「介助」とは果たして何を意味していたのでしょうか。寮の生活をほとんど全面的に運営しているような働なをも指すのでしょうか。それとも活動の主体を彼らに置きながら、彼らに応じ、同時にまたある種の発達の方向性を見い出してゆくような働きを指すのでしょうか。多分に二者択一的に提示し過ぎたかもしれませんが、私達の周辺には基本的な点で問い直してみる余地が多くあるように思われます。精神薄弱者が疎外されている状態を脱し、彼らと

職員との間に相互関係が生れ競合してゆく段階でどのような生活の形態が展開されるものであるかという点については広く知り得ませんが、介助等の処遇の形態や施設の組織形態或いは評価表が観察表等に組み込まれている多数の項目等が実際の生活とどのように対応し統合されるべきか知りたいものだと思います。

処遇の形態や施設で使用している評価表や観察表等の項目やその構成およびそれらの統合を反映するはずの施設の組織形態等を指導の形態とするなら、施設における生活の形態は施設における日課の具体的な内容であると言う事ができますが、施設における生活の形態が施設における指導の形態と相似的であれ相似的でなくても、ある視点に立って今後の方向を探る為に、生活の形態の問題点や指導の形態の問題点へと私達の眼を向けてゆく必要は無いでしょうか。

これまで生活の形態や指導の形態を一連の疑問のなかで取り挙げながらも、精神薄弱の発達をそれらの中心的な軸に置いてきた事に気付かれたと思われますが、精神薄弱の発達という視点に対してはしばしば意地悪な疑問が投げかけられてきたように思われます。精神薄弱の行動は所詮その場その場の指導の形態に左右されるのではないか、だから言ってみれば、どこにでも成るって事じゃないか、というものです。しかし、この一種の社会決定論的な疑問の蓋然性について否定と肯定のどちらも決定的な根拠を持つに至る程私達は多くの事を試みているとは思われませんし、多様な精神薄弱を想定しては無謀な疑問すぎます。その蓋然性の是非を保留する理由のなかで決定的な理由は、精神薄弱福祉の課題が直接的にはその疑問の是非には無いという見解のなかに示す事ができましょう。そのような疑問をむしろ卒直に受けとめながらも生活において精神薄弱の自立に助力する事を精神薄弱福祉の課題に捉えたいと私達は考えます。

ここでは精神薄弱の自立に加えて、自立への助力について言及します。しかし、それらの課題を具体的な場において考えるとすれば施設における日課の具体的な内容を意味する生活の形態について言及しなければなりませんが、施設における生活の形態の諸問題をも踏まえ検討するという意味で、次ぎに一般的な生活の構造を素描してみたいと考えます。さらに加えて処遇の形態施設で使用している評価表や観察表の項目やその構成およびそれらの統合を反映するはずの施設の組織形態等を新たな指導の構造として組み立てる為の課題をいわば作業仮説のような意味で提示してみたいと考えます。

ここでは自立の意味を「ある事項を自分でやろうとする意欲があり、それを自分の判断で以って達成できる働き」を指すとしておきましょう。

自立には「①他の力によらず自分の力で身を立てること、ひとりだち、②他に属せず自主の地位に立つこと。独立」（広辞苑）という意味がありますが、不充分ながら私なりの定義を敢えて試みたのには、いくつかの前提があったからです。

自立を絶対的尺度としてではなく相対的尺度として使用します。例え食事や刺繍の構図を自分で作る事ができなくても、食事を摂る事ができ、刺繍の構図さえあれば自分で解釈し作品として完成できるという場合には「……の条件の下では自立している」と言う事ができます。これは生活年令や精神年令によって数量化されてしまう尺度ではなく「具体的にできる事の尺度」と言えます。これは措置理由とも関連します。すなわち私達は収容施設というある意味で特殊な実験場でそれぞれの課題を試みているのですが、個々の精神薄弱を巡る直接的で社会的な問題と本来密接に関連するはずの措置理由が措置の過程のなかで余りにも曖昧なまま放置されている事は収容されている精神薄弱を施設外の社会と結びつける上に大きな障害となっているのですが、措置理由が曖昧ならその曖昧さに問いかける為にも、また措置理由が明瞭なら明瞭な措置理由に答える為にも、「具体的にできる事の尺度」をより有効に用いる事ができるのではないかと考えます。念を押して言えば、自立は具体的な表現で表わされなければなりません。それはまた、達成できた事項を繋げてゆく事によって発達のプロセスを跡付ける事ができるように思われます。自分でやろうとする意欲を付加したのは関係の視点を付け加える意味があったのです。

私達はしばしば「あの子にはやる気が無い」「やろうとしない」「あれができない、これができない」と言いますが、「ある事項をどのようにしたらできるようになるか」考えるのも自立への助力の一つではないでしょうか。

それについて私達は精神薄弱の特性に対応させ、「指導にあたっての基本的留意点」として10項目を挙げているH学園の資料のなかに貴重な実践の足跡を見る事ができます。全てを紹介する紙面がありませんので要約しますが、指導する職員からの配慮がよくなされています。精神薄弱にとって明瞭に理解できる方法を採るとしながら五項目めに「やってみせる」「一緒に

手をとってやる」「必ず確認する」「時々確認の予告をしないで確認する」（精神薄弱収容施設における訓練指導体系について、P91〜P94昭和44年12月26日、日向弘済学園発行）というように段階づけています。これによって「自分でやろうとする意欲が無い」との嘆きが必ずしも精神薄弱に帰せられるものでない事を汲み取る事ができるのでは無いでしょうか。むしろ、そうした嘆きには指導する職員に指導意欲の低下が見られないでしょうか。

これまで述べたような自立への助力は施設における指導の形態のなかで行われる訳で、日程や日課の内容に対応するはずの評価表、観察表或いは施設の組織形態に言及しなければなりませんが、それらによって指導の形態についての像を結ぶ前に、一般的な生活の構造について素描し、指導の構造を検討する上での一つのテコにしたいと考えます。

指導の構造を検討する手がかりを探がすのにいくつかの方法が考えられるのではないでしょうか。先ず収容施設に措置されてきた理由に対応させるという方法が考えられますが、先にも述べましたように措置の理由が措置の過程のなかで曖昧なまま放置されているのに加えて、措置における何らかの契機を知っているはずの家族成員達が余り話したがらない事情もあって私達と家族との交わりが必要ですが、容易にはゆきません。さらに措置理由が精神薄弱や彼らの家族をとりまく社会の通念と関連する場合には指導の構造を精神薄弱の措置理由から直接導き出すという方法には限度があります。また精神薄弱の一般的な特性から指導の構造を導き出すという方法が考えられます。人間の初期の発達にみられる基本的な生活習慣・作業訓練・教科学習等を指導の形態としている施設が一般的ですが、精神薄弱の特性を分類した結果、指導の形態が分節的になる恐れが多分にあるように思われます。むしろ、措置理由や精神薄弱の一般的特性を考慮しながら、精神薄弱の問題を人間の「存在」として捉えるべく、人間の一般的な生活の構造を素描してみる必要を感じます。以下、人間の発達とそれに付随する社会関係とを軸に人間の一般的な生活構造に言及します。

生活の構造については詳しく定議づけるほど研究しているつもりもありませんが、副田義也氏の論文〔「生活の構造」（福祉社会学一章、川島書店）〕がありますので、若干の断わりを記しておく必要を感じます。

誤解を恐れずに言えば、副田氏は「生活」概念の定義を初めに保留しながらも、次第に生活過程の構造として明らかにし、さらに生活過程の構造を社会構造に関連づけながらも一貫して貧困への疑問を私達に問い続け、そこに福祉の一つの視点を見い出しているように私には理解された。

ところが私のいう生活の構造は人間の発達を特に精神薄弱福祉における指導の構造に対応させて捉えようとしているので、氏が主眼を置いていたと思われる、すなわち構造の用語に含まれる統合の視点として位置づけたと思われる労働（およびそれの代価との関係）に関しては発達の結果修得されるように描かれ、発達の変数を含むと考えられる社会構造については触れませんが、いずれ精神薄弱と彼らの家族を巡る生活の構造を家族福祉の視点から纏めてみたいと考えます。いま、私には副田氏が「すでに、その一端をあきらかにされた生活の構造は、空間と時間ということおりの面で、どのような形式があたえられているかが、さらに追われなければならない。同（前掲書P37　傍点は私がつけた）とした事柄の内容が待たれます。

さて私達の毎日の生活を振り返ってみますと寝床から起き、着換えをし、布団をたたみ、みだしなみを整えたり減いは食事を摂ったり眠ったりというごく日常的な活動があります。それは流されてゆく時間と比喩的に表現できますでしょうか。流されてゆく時間というのは人間の活動が慣性の法則のようにある一定の速さのなかに順応していて、生活のなかにあって「なぜ」とその理由を問うほど意識されない時間を象徴的に表現してみたものです。それは仕事のように企てられる意図のある労みというよりも、食事を例にあげますと、お腹がすくと食べねばならない事に気付かされたり、或いは時間がくれば食べるといった事項です。私達は生活に不可欠のものとして、そのような習慣をもっています。

この基本的な生活習慣を人間の一般的な発達と大雑把に比較してみますと、乳児は摂食・排泄・睡眠・それらに関連すると思われる満足感空腹感・不快感等によっては泣いて訴えるという一日で終始するように思われます。そうしていわば基本的には所与としての家族関係を媒介にして「自分でやってみたい」ような仕草に始まって生活の様態を体得し、次第に他の家族成員の介助の手から離れてゆきます。

そのような基本的な生活習慣を身辺の自立に関する事項としておきましょう。勿論、生活習慣の項目や技術とその手順等については文化的な相対性を忘れる事はできません。また運動が

停止した時に速度が逆に意識されるように、生活習慣が停止し、生活習慣自体の活動も停止しかねない貧困の問題等、社会構造に関連する問題もありますが、先に述べましたように主題ではなく、ここでは生活習慣の項目を強調しています。また、ここで生活習慣という事項に触れたのは、精神薄弱のなかには「食事を口まで運んでやらなければ食べられない」人や「トイレに坐って排泄はできるけれども、指示されなければトイレに行かず、１０日も便秘でいる」等の人々がいるからであり、人間の一般的な発達の上からも初期の事項と言えるからです。

生活習慣の修得と共に注目してよいのは言語の発生です。言語の発生は極めて密接な対人関係のなかで具体的な事物を媒体に、しかも繰り返えし行われる意志交換を通じてなされるのではないでしょうか。それは具体的な事物と観念とを結ぶ糸であり、後々に必要な社会関係のテコと言えるものでしょう。この言語を通じて生み出される知的体系は乳児との接触のなかに準備され、以後、それは領域を拡大し、深化してゆくように思われます。

ところで精神薄弱における指導の形態が基本的な生活習慣と共にこの知的体系の領域に入り込んでゆく場合も先に述べた指導上の留意点を想起すべきでしょう。精神薄弱の指導で経験学習が強調されていますが、この点に関連します。例えば私達は２ケ月に一度施設の外に出かけますが、近くのバス停から駅まで行くのに必ずバスに乗車します。ここ一年半余りたって、自分で運賃の３０円を準備しバスの運賃入れにそれを入れる事ができるようになりました。言うまでもなく、職員が自分で支払ってしまう担当の精神薄弱の場合には今だに支払いができるかできないのか分らないままです。「いくら必要かな……」「……」「３０円だったね……」「……（赤銅色の玉を三個、財布のなかから取り出して眼の前に指し出す）」「そう大丈夫だね……」「……（バスに乗り、釣銭の要らぬ運賃入れに入れる）」という行動のなかに例えそれがバスに乗ってどこかに行くのが楽しみだから指示に従っているだけだとしても今後の指導によっては知的体系への一歩となるように思われます。

これは幼児が、特に母親に連れられて外出した際などに修得してゆくものではないでしょうか。基本的な生活習慣が身についたとは言え、洗面一つを例に挙げてみても歯みがき粉、歯ブラシ、石鹸等は常に用意されている状態で行われる訳ですが、幼児には基本的な生活習慣や遊び或いは子供の嗜好品等、時々に必要な物を自分で用意するといった活動領域の拡大や活動の知恵が生れてくるのではないでしょうか。私はこの知的体系の基礎と具体的に結びつく事項を基礎的な社会性と呼び精神薄弱の基本的な生活習慣の外側に位置付けたいと考えます。少なくとも、これまで施設における精神薄弱の指導の形態に著しく欠いていた点であるように思われるのです。施設が町並みからはずれ、空間的な連続性を欠いていた為でしょうか。施設の風土とも言える心理的な閉塞性の為でしょうか。それともお金が無かったからでしょうか。

その後、教育制度等による知的・運動感覚的な機能の発達、近隣や学校等での仲間集団との遊びや家族の活動の範囲によって、子供は何かを感知し、子供の世界は次第に多項に拡大されてゆくのではないでしょうか。食事一つ例に挙げてみても、何を食べたいか、何を食べさせたら喜ばれるか、何が身体に良いか、どんな材料が必要か、材料は幾ら位で買えるか、家計との関連では何が買えるか、買物に幾ら位用意したら良いか、欲しい物はどこで売っているか、買物に行くにはどの道を行き利用できる交通機関は何か、手さげか何か持って行った方が良いか、どうしたら良い買物ができるか、買う時の店員との応対の仕方、調理用具は整っているか、用具の扱い方、調理の手順と方法、食器はどんな物が必要か、配膳の仕方、食べ方、うまかったか、まずかったか等、数え挙げればきりが無い程の判断の項目が人によっては出てきます。このあたりではもう、発達の視点からは捉えにくくなってきます。従って「……ができる」という技術的に多様な活動の領域には触れず、活動領域の拡大によって生ずると思われる集団における問題として役割と対人関係に眼を向けてみたいと思います。

しかし、私達はここでも発達の軸を想定しにくくなります。適応という概念の導入が好都合のように思われますが、次の理由を述べて保留にしておきたいと思います。

個人の行為と組織の運営に属するような行為の分析の方法、集団のなかにおける役割遂行について指導の指針としての価値判断をどのように設定すべきか、集団形成の過程に価値判断が顕在化するなら、その分析の方法をまた対人関係にあってはＡ君とＢ君との間のトラブルや各自主張する事項の正当化、日常生活のなかで起っている対人関係の事実分析等の課題を、指導の構造を構築する前に、幾分でも成し就げておかなければならないと思います。このような一連

の課題がある今、適応概念を導入する事の是非は差し控えたいと思います。現段階ではそれらの課題に関連するケースを集めていると報告するに止めたいと思いますが、職員の寮生に対する接し方が集団の規範や集団における個人の心理、或いは個人間のトラブルや各々主張する正当性に多大の影響を及ぼしているので、分析をより困難にしています。しかし、役割と対人関係に関する事項を指導の構造に組み入れるべきだという理由は実際の生活でそれらに関するイザコザが多いというばかりでなく、どこにでもある問題であって事実私が担当し、後に就職していった精神薄弱者のなかには職場の人々からボイコットされた形で解雇された例があるからです。これら役割や対人関係についてのケースを単純にモデル化し、指導の用具として仕上げ、役割や対人関係について考える素材にしたいと考えています。そうして膨大すぎるかもしれませんが、自分達の集団を自分達で生み出した統合の原理の下に形成する。その主体になる精神薄弱を指導の目標に据えたいと思います。また精神薄弱の情緒の問題も、ここで役割と対人関係の相の下に眺める事もできるのではないでしょうか。

この辺でいま一度人間の一般的な発達を社会関係のなかでみてみますと、職業に就くという事項が想起されます。それは一般的には作業能力の指針としている年令や学歴によって左右される場合が少なくありません。さらにさまざまな項目を下位概念として設定し職業の適性や職務分析に基づく人事考課等が生み出されテストされていますが、職務遂行能力の未知数を測定したり職務遂行能力をチェックするような場合が用いられているようです。

精神薄弱の職業上の自立を助力する為の指導にあたっては、先に述べた指導上の留意点を再び想い起こす必要があるのではないでしょうか。また指導上の留意点に加えて実際にできる事に焦点をあてる必要があるように思われます。すなわち私達が精神薄弱の職業上の自立を助力するには、ある仕事を分り易く合理的に分析して提示する事が技術修得に関する一つの条件になるのではないでしょうか。一般に施設において手工芸品についての指導が圧倒的に多いのは、仕事の手順を小規模な形で合理化でき、技術の修得もいわば一人を単位にして行い得るという条件にも依るのでしょうか。しかしまた、技術的な事項に伴なって、ある課題を達成する喜びが生れ、さらに次の課題への姿勢を助長する点も見逃がせません。分り易いように合理的に仕事を分析でき、それに必要な技術を修得でき、課題を達成できた喜びを知る事のなかに、精神薄弱が職業上の自安を成し就げてゆく事のできる条件が含まれているように思われます。

さて、この作業指導の副次的効果として、しかし精神薄弱の生きがいと関連するという意味では主要な効果が強調されて良いのではないかと考えます。施設において僅かでもいい自分で作成した製品に対して賃金が支払われ、基礎的な社会性で言及したように活動領域の拡大の為にそれが各自使用できる余地を指導の形態に組み入れたなら、生活での自立の基礎としての具体的な条件がそこに生れてくるのではないかと思われるからです。それを実践している施設は多くないようで、私達の施設でも何やかやと理由がつけられ、気配すら感じられないのは残念でなりません。

この他にもさまざまな事項が考えられますが精神薄弱福祉の構造を人間の一般的な発達にみられる生活の構造に対応させ、素描できるように思われます。最後に生活の構造を精神薄弱福祉の指導の構造として構築してゆく上に必要な留意点となりそうな事項に言及し、このささやかな報告を終りたいと思います。

先ず基本的な生活習慣、基礎的な社会性、役割と対人関係、作業内容等の指導の項目を分断された状態ではなく、相互の連関を発達の軸に位置づける必要があります。従ってその為には今後さらに詳細な分析と統合の視点が明らかにされていかなければなりません。次に具体的な処遇の場面に活用できるように評価表・観察表等を作ると同時に、考えられた指導の構造に対応して実際の生活の形態が組まれなければなりません。実際の生活の形態は単に必要な項目だけを満たせば良いという訳ではなく、指導の構造で考慮された統合の原理を具体化させたものでなければなりません。それには一人の職員が少数の精神薄弱を一貫して指導するのも良いでしょうし、ある数の職員が各自役割を決め、各自の役割を全体のなかで位置づけ、意見を述べ合い指導を検討するといった形態をとるのも良いでしょうが、それぞれの形態の欠陥を認識し補う必要がある事は勿論ですが、注意しなければならないのは、いずれの場合にも一人の精神薄弱を分断するような組織形態は考えもののように思われます。また施策を短期・長期に施策を組み立ててみるのも必要な事のように思われます。

稚拙な分析や視点を書き綴りながら正直なと

（Ｐ４へつづく）

横山礼子

精神科病院における生活療法の試み

＜生活療法の導入＞

武田病院は、初期においては個人精神療法を重視し、治療者に患者関係以外の刺激を極力避け、患者の精神力動はすべて治療者によって把握されていたが、増床后、スタッフの治療エネルギーの拡散、患者間関係の増大などにより、すべての患者と十分な精神療法的コミュニケーションを保つことは困難となった。この様な状況において、サイコロジストによる集団精神療法が、更に生活療法を充実させる為にソーシャル・ワーカーが導入された。

ソーシャル・ワーカーが導入される以前から生活療法の試みがなされていたが、うまく行かなかった。最初に3人の非専門の生活療法担当者を採用したが、各々がバラバラで看護婦達との折合いも悪く、1年ほどで、止めていった。その后、看護婦の中から生活療法担当者を出し朝の体操や散策、ソフトボールなどの準備と参加観察をするような体制にしてゆこうとしたが看護婦集団から除け者にされたり、又、本人自身生活療法係としてよりも、看護婦としての同一性が強い為、看護婦集団からはずれることを好まなかった。この様な経過の中で、生活療法専門職として昭和44年社会福祉学科卒の男子1名が、そして翌年同女子1名と、心理学科卒の女子1名が採用され、更に私が実習を兼ねパートとして参加した。

＜ワーカーによる生活療法の展開＞

武田病院では、精神科病院で一般に行なわれている作業（荷札作り・農耕・院内整備等）というものはなく、患者の任意的参加によるレクリエーション活動を中心に、盆踊り・クリスマス等年間行事、あるいは患者による自主的な、朝・晩の「お茶会」等を生活療法として治療的に方向づけて来た。

ワーカーは、3つの病棟、すなわち1階・閉鎖病棟（40床）、2階・女子開放病棟（50床）3階・男子開放病棟（50床）にそれぞれ配属され、病棟での患者との接触、看護婦・医師との連絡を通して患者を把握し、レクリエーション活動を媒介として患者に働きかけ又、接触する。

その中で、まず週間スケジュールに合わせてレクリエーションのスケジュールと年間行事とを確立した。看護婦が担当していると、どうしても、病棟の都合等によって左右されがちであった。現在、園芸や散策等季節や天候に左右されるものを除いて、必ず毎週行なわれている。レクリエーションスケジュールといっても、病院全体のスケジュールの中で行なわれるものなので、入浴、シーツ交換等患者の病棟生活や、職員のミーティング等のスケジュール等を考え合わせて行かなければならない。現在は、次頁の様なスケジュールの中に、レクリエーションが行なわれている。

患者は、これらのスケジュールの中で、週1回の医師との面接、その他に個人精神療法（全患者の約¼）と、集団精神療法（7グループ、全患者のうち50％強）を受けている。レクリエーション活動は、これらの治療の進展と平行して行なわれている。

＜レクリエーション活動の意義＞

レクリエーション活動の意義は、様々なレベルから検討されると思うが、患者の入院生活の経過に従って見てゆくならば、1、新入患者の病院生活への導入として、2、社会的・対人的緊張からの開放の促進、3、単調になりがちな生活への刺激、4、社会的対人的関係の現実検討と回復が見られる。1、2、3は、レクリエーションに参加することによって、3、4はレクリエーション係やグループ活動に参加することによって得られる。

更にレクリエーション活動を媒介として、看護婦やワーカーは患者の様々な側面に接することができ、それらを媒介とする治療的関係の成立が見られる。たとえば、一生懸命描いた絵を看護婦達に上手だと誉められ、低められていた自己評価を高める。あるいは、言葉が乱暴で看護婦から、とっつきが悪いと思われていた女子患者は、看護婦が慣れない手つきで懸命に編み物をするのを見て「上手にできたよ」と看護婦を励まし、物事に真剣に取り組む姿に自己同一視し、親近感を持つようになった。看護婦も、患者に対する印象を新にした。又、回りが自分を陥入れようとしていると感じ、歌や絵などに誘っても実験台にされると思い参加を拒否して

	9	10	11	12	1	2	3	4	5
月	掃除	検温	体操	園芸	投薬	食事	準備	歌	ミーティング	グループ活動	投薬	食事
火	〃	〃	〃	〃	〃	入浴	(各階スタッフミーティング)	(新入患者オリエンテーション)	〃	〃
水	〃	〃	シーツ交換	(医局ケースカンファレンス)	〃	〃	図書	準備	絵画	グループ活動	〃	〃
木	〃	〃	体操	〃	〃	入浴	ソフトボール、手芸	〃	〃
金	〃	〃	〃	〃	〃	散策	〃	〃
土	〃	〃	〃	〃	〃	入浴	〃	〃

※　レクリエーションとしてワーカーが関与している。看護婦も参加。
(　)スタッフのスケジュール
グループ活動＝行事の実行委員会、文集作り等

いた患者がワーカーの勧めた手伝い等をするうちに、一緒に絵を描く様になり、更に自分から絵や習字をする様になった。「以前は人が信じられなかったけれど、今は人が信じられる」と言って、準備係を積極的にし、ミーティングや集団精神療法の中でも活発に発言している。

＜生活療法の課題＞

〃―生活療法における治療的リーダーシップの問題――〃ワーカー達は、生活療法を担う者として期待されたが、ワーカー達自身、生活療法に関する知識を持っているわけではなかった。しかし、患者と接し、暗中模索ながらレクリエーション活動を展開し、又精神療法について学ぶうちに、生活療法を次の様に捉えるに至った。すなわち生活療法とは「治療者と患者との間になんらかの効果的活動（作業）を媒介とする治療的人間関係の促進をはかる療法」として定義される作業療法を、日常的な生活場面にまで広げ、生活場面そのものを媒介とする治療関係を形成してゆこうとするものである。又、Redl, F．等の行った生活場面面接（lite space interview）――施設内生活を含む実生活場面に治療者が接触し、その生活場面を、治療的に操作すると共に生活場面における出来事、体験、人間関係等々を通して、心理治療的な働きかけ（面接）がなされる――を考え合わせる時、病棟で患者と接する看護婦やワーカーと、面接室構造で治療を行う医師やサイコロジストとのより密接な連携（あるいはチームと言った方が良いのかもしれないが）の必要を感じる。

チームがチームとして機能する為には、医師が、患者個々人の精神内界に対して持っていると同様の関心を、患者をとりまく生活場面、生活構造に向けてゆくことぎ必要不可欠のものとなるだろう。患者をとりまく生活場面、生活構造とは、病院社会そのものであり、病院社会を治療的に方向づけることができるか否かは、看護婦をどこまで治療スタッフとして迎え入れることができるかにあると考えられる。治療チームのリーダーシップは医師に委ねられるものであると思うが、それはチームの自由なコミュニケーションと、各々の治療的役割の相互的認識を前提としている。生活療法を、生活場面の治療化として捉えるならば生活療法の発展は、治療チームの育成と医師によるリーダーシップの養成を抜きに考えることはできないだろう。

（よこやま・れいこ）

研究所諸活動

相談室の近況

村山恵美子

昭和41年に発足された相談室も以来目立たない存在ではあるが、細く長くまた着実に進み続けてきている。その間の相談室の歩み、その特徴等は、これまでは福祉ニュースによって紹介されているので、今回は昨年9月以降の状況を追ってみたい。

まずスタッフ側からみると、相談室の規模にしては豊富な人材（ケースワーク関係、心理学者、医師等約7人）を持ちながら、その力はフルに活かされたとはいえない。それにはまず、ケース数が少ないことがあげられるが、また、スタッフ各々が相談室以外に多忙な専門職を持っていることもあり、一堂に会する機会に恵まれず、研究会や、ケース会議等も持てない状況である。しかしこのことは決して来談者をお粗末に扱ったり、軽視していることではない。ひとたびその必要があれば、各々がその専門に於いて、じっくりと来談者の問題に取り組んでいるのであり、またスタッフ全員がいつでも必要に対して答えられる可能性と準備をもっているといえるだろう。他の多くの機関にみられる様なさまざまな制約に悩まされることなく、来談者の問題に真に取り組むことの出来る利点を持つ当相談室が、さらにより良い発展をしてゆくには、まだまだ改善される余地は多分に残されているだろう。スタッフの努力と共に皆様の御意見と御援助を期待している。

さて次に、ケースについてその傾向をみると以下の如くである。

①来談者数　12（男5、女8）
②ケース数　　8（男7、女1）
③年令別ケース　　④問題点

	男	女
10才以下		1
10代	5	
20代	0	
30代	1	
40代	0	
50代	1	

	数
登校拒否	5
非行傾向	1
相続に関するトラブル	1
精神不安傾向	1

上記の資料でみる様に全体としては、登校拒否の問題が多く、その内容的傾向をみると母親が子供の登校拒否という現象のみを問題としてなんとか学校に行かせたい、学力の遅れを防ぎたい、その為に家庭教師を、という訴えが占めている。それらの中からケースと援助の例を12をあげてみよう。

ケース1（T.T.41才　主婦）

（主訴）　16才になる息子が暴力、授業のさぼり、テスト中カンニング等で無期停学中。
（援助内容）　夫婦間の問題は特にない。性格的弱さを持つ息子に対し、学業成績、進学を強いていた母親に息子及び自我、母子関係への洞察の援助、子供には、自己の行動の明確化と共に、大学進学を目的として、学校との唯一つのつながりになっている運動部をコントロールする様援助。その后、本人の反省と学校、クラブの理解によって復学のチャンスも得られ、運動部の方も意欲的に参加している。

ケース2（M.I.　主婦）

（主訴）　10才になる女子の登校拒否。
（援助内容）　夫との間に離婚問題あり、別居中、財産について家裁調停中。
母親は子供の登校拒否を勉強嫌い、我がままと理解している。母親自身の自我の洞察、成長、及び夫婦間の問題の再考慮が必要とされる。子供には事情を把握したうえでの家庭教師による援助。その過程で、子供の心中には父母の問題についてのことが非常に多く占められており、又父親の不品行もよく知っており登校を嫌がるのもそこに起因していることが明らかになる。従って事態を隠蔽して子供扱いをするのでなく親子間の再洞察と関係の形成と成長が必要とされるが、両親への助言はかなり困難なものである為子供に対しては登校を期待するより、さらに治療者との関係形成、また他の子供の集団への参加によって現状悪化による非行への芽生えを防ぐことに力を入れている。

（なお、昭和45年9月よりケースワーカの戸塚さんより、相談室事務関係は村山に変わりました。今後とも御協力、御利用下さい。
（むらやま・えみこ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ボランテア活動としての通園グループ」

長島正章

この原稿が、福祉ニュースにのる頃には、多分、我々のグループも、消滅しているだろう。

どこの施設にも入れない在宅の障害児のため